
みちてしうつろのものがたり

タキツチヨス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちてしうつろのものがたり

【Nコード】

N3655Y

【作者名】

タキツチヨス

【あらすじ】

久遠の時を閲した、うつろのいろの蛾がめぐる、虫の世界。小さい命の世界でおきる、小さな奇跡と命のはなし。

虫の話です。虫しかできません。人間はたまにしかいません。心理描写以外の擬人化はしておりません。虫嫌いの方は、ご閲覧の際はご注意ください。縦書きPDFでの閲覧を推奨します。

壺・つるばみいろの

よく晴れた春の空がひとかけら、小さく切り取られて、ひらりとこぼれおちる。

人ではないものの目には、そのように見えるそれは、人の目には映らない。

なにより、ヒトと彼等との意識のあり方はことなっているはずだ。だが今は、かりそめにヒトの言葉をかりて、彼等の交わしあうそれを、語ろう。

言葉を彼等は持たないが、言葉なしではヒトは何一つものがたることはできないのだから。

「空蚕^{くさぬ}。そこでうかうかしとるのは、空蚕じゃないかや？」

呼ばれる声は、昼間に聞くものではなかったから、風のまにまに舞っていたそれは、興味を引かれた。

くるりと風の流れからはずれ、一軒の民家の屋根に降りる。

色だけなら、大水青^{おおみずあお}にもこれくらい濃い空色のものも、いるかもしれない。

だが、紋白蝶ほどの大きさしかない翅も、ほっそりした体も、鳥の羽毛のような幅広の触角も、ただ空色一色に染められた彼を分類

できる系統樹は、ヒトの世には、ない。

「この里には、もう二十年は来たこと無いんだけどな。僕を見分けられたお前さんは、誰だい」

ちよこん、と空色の蛾は体の向きを茅葺の軒へ向けた。

茅の陰から、きらめく八つの眼が、彼を見つめていた。

「ああ、やつぱり空のだったわな。お前様はわつちを覚えちゃおらんだろうが、わつちは生まれてすぐにお前様を見たよ」

すらりと長い橡色の脚を伸ばして、彼女はうらかな陽光の下に
するりと這い出てきた。

「ああ、前に僕を食おうとした脚高の嬢やか！ やあ久闊。すいぶんと長生きしたもんだね」

空蚕と呼ばれた彼は、自分よりはるかに大きなその蜘蛛を見て、
感嘆の声をあげた。

脚高蜘蛛は大きい。そして彼女は、通常の彼らよりも、さらに二周りは大きく、南方の鳥喰い蜘蛛ほどもあった。

もとより、彼らも野山にいる在来の小脚高蜘蛛とは別種の、南方から来た種ではあるが。

「この家のヒトはわつちを大事にしてくれたからねえ、今までは殺されずに済んだのさ」

「ほかの脚高の三倍は生きた計算になるかな。息災でなによりだよ。もう嬢やではなくて、刀自殿って呼んだほうがいいね。ともあれ、僕に二回もまみえる子は珍しい。また会えて嬉しいよ脚高刀自」

空蚕ははたり、と翅を伏せた。雨ざらしで黒ずんだ茅の上に、ひとかけらの青空が広がる。

「刀自はやめとくれ。おまけに存外な言祝ぎやな。うつろのは、外国から来たものに厳しい性じゃなかったかや。わつちらも、もとを正せば異国渡りの蜘蛛ぞ？」

「君らは野山の者たちをあんまり食べないしね。増えた割りに、豊葦原にも、ヒトにも、これといって害のない稀有な族だよ」

「そういつて持ち上げてもらうと、頼みごともしやすくなるという

ものさ」

「頼みごと？」

「わっちでは叶わないと諦めておったが、今お前様がここに来た。そしてわっちがそれに気付いた。ならば、理を少しばかり、動かしてもいいと自然しぜんが言うておるのだわ。ちいとお前さんの力を貸しておくれでないか」

「僕には自然の理を動かす力なぞないよ」

「わっちを見ねえ、空の」

脚高蜘蛛はじり、と青い蛾ににじりよった。

「わっちを、おかしいとは思わないかえ。そりゃあ、わっちはたっぷりとごきかぶりどもを食ったし、鼠の小さいのもよう食ったわ。したが、それだけでこうも大きく、長く生きられるもんじゃあ、なかるうよ」

「そんなことも、たまにはあるかもしれない」

「ごまかしは無しにしとくれよ。わっちは、何も知らないちっちゃい頃、お前様を食おうとしたろうが。逃げられはしたが、その時、お前様の翅の粉のほんの一粒、わっちは舐めた」

「ああ……そりゃあ……」

ふるん、と空蚕は触角を揺らした。

「刀自殿の『理』を、揺らしてしまっただね」

「お前様は、なりこそちっこい蛾ひつだが、『理』の外におられるお方だ。だから、それを見込んでのお願いさね。わっちのように、強くしてやってほしい子がおるのや」

「刀自殿が強く大きくなったのはまれなことだけど……刀自殿の子かい？」

「いいや。この家で、わっちを大事にしてくれたヒトがおったのだが、そのヒトが、最期まで気にかけていた子がおるのや。この子の見届けを、頼まれておくれでないか」

「ふうん？」

「まあ、とにかくこっちにお入りな」

蜘蛛はすするとまた軒下に消えた。空蚕も、はたん、と舞い上がり、その後へ続く。

障子紙も黄ばみ破れた窓からはいった小屋裏は、荒れ果てて廃墟同然だった。部屋には、棚がいくつもつくりつけられていて、竹を編んだ網の上には、枯れた木の葉が散らばっている。

「こつちだよ、空の」

蜘蛛が、その棚の一つへ空蚕を招いた。

蜘蛛の長い脚の下には、一匹の白い芋虫が庇われていた。

壺・つるばみいろの（後書き）

・アシダカクモの言い回しは江戸弁と京都弁をあえて混ぜたものになっています。

・今作では、古語や文語的な言い回しがしばしば使われます。
オオミズアオ

・大水青：淡いブルーやペールグリーンの巨大な翅をもつ蛾。美しい上に人懐こく、もふもふしていて顔が愛くるしい、という完璧生物。

式・ましろの

「あしながちゃん、これだあれ？　これだあれ？　あとね、あとね、あたち、おなかすいた」

おどおど、もちもちと、白い虫の子は脚高の足に身を寄せる。

「桑ツ葉が、いよいよもう無いかえ」

「みんな、しおしお。からから。たべられるの、ない」

「我慢し。もう少し待ってたら、美味しいのが食えるかもしれんな」

「はあい」

かろうじてまだ青味を残した萎れた葉を、のろのろと虫の子は噛しがみはじめた。

「……家蚕かいこの子だね。まだ小さいなあ。ようやく二回目の衣抜けが済んだところ？」

「いやいや、あれで3回目の衣抜けは済ませておるよ。体が小さいのは、ここところ、ちゃんと飯を食っていないからの。これからが、いっち飯の要る時やのに」

「蚕は食べないの、刀自殿は」

「ごきかぶりどものほうが口に合うでな。それに、この子はヒトが大事にしていた子や。わっちが守らずしてどうする」

「それがおかしいんだ。どうしてヒトに義理立てして、蚕を刀自殿が守るのだけ」

「ヒトの言葉がわかると言うたら、お前様は笑つかえ」

「ええと、ああ、その、それはたぶん僕の鱗粉のせいだね……そもそも、六ツ足の族うからと、多足の刀自殿が話していることが、もうおかしいな。うっかりしてた」

空蚕は、決まり悪そうに、前脚でくるりと自分の触角を撫でた。
「それが良いことか悪いことかは、わっちの知ったことじゃあないが。とにかく、この家には、古いヒトのおなごが一人おったのさ。ぴんと体が伸びていたところから、ここで、蚕たちを育てておつてな。蛹が好物と見えて、よく繭を熱い水でばらしては、取り出していたっけ」

「目当ては、繭のほうだったと僕は思うけどね」

撫でていた触角を離して、空蚕はつぶらな黒い目で周囲を見る。

かつては、全ての蚕棚に、白い虫たちはたくさん放たれていたのだろう。

「繭なんぞ、食えもんもものどうすんのえ？ とまれこつまれ、そのヒトは、そりゃあ大事に蚕を養っていた。自分が食うものに、あんなに手をかけるなんて、変わった生き物よなヒトは」

「ヒトってのは、そういうものらしいからね」

「で、そのヒトが、わっちに前足を合わせて拝みよるのよ。ありがとうね、あんたがごきぶりを食べてくれるから、私も蚕も悪い病氣にかからないよ、ありがたいねえ。と、そう言うのや」

「そりゃ変わったヒトだねえ」

「だろう？ そう言われたら、もう蚕どもを食うなんてできなくてねえ。それに、わっちを見ると気持ちが悪いの、夜見たら縁起が悪いのと、追いつく人間ばかりやったのに、そのヒトは、わっちの目を綺麗だとも、言ってくれたのや」

八つの単眼が、蚕室の薄暗がりの中で、水晶の玉を連ねたにも似て、僅かな陽光にきらめく。

「綺麗、って意味がわかるんだね、刀自殿は」

「そのヒトが、綺麗だねと言うものを見聞きしておつたら、なんとのう、知れてくるわ。ああ、ほめてもらうというのは、快いものだねえ。お前様の粉の力でヒトの言葉がわからななら、知らなかったもの」

「困ったなあ……僕を食べて死ななかったものは虚空蔵に触れてし

まうのかな。もつと用心しないといけないな」

また、くると空蚕は両方の前脚で触角を撫でた。ヒトでいうなら、頭をかかえて髪をかきむしっている、というところか。

「ようわからんが、お前様をかじると智慧がつくのかや」

「智慧は毒だよ。理を外れる大きな毒だ。ごめんよ、刀自殿の理を曲げてしまつて」

「ようわからんが、舐めてしまったのはわつちだしの。わつちは困つておらん。ああ、そうだ今困つておるんだったわ。蚕のことや」

「ああ、そうだね、何で守るのかつてことだね」

「そのヒトのおなごがな、動かなくなつたのや。そうなるちつと前から、蚕の繭もばらさず、ちゃんとつがわせて、こつちかたの棚にのる分だけ、子を孵して育てておつただけど」

かつん、と蜘蛛は苛立たしげに、牙を蚕網の枠に打ち付けた。

「そのヒトにも、子はおつてな。どこぞで嫁女とつがいになつて帰つてきたのだが、こやつらが、わっちも蚕も大嫌いときた。ヒトのおなごは、横になって動かなくなる前に、そりやあ蚕のことを大事にしてくれと、そやつらに頼んでいたのにさ。嫁女にいたつては、頭の上に虫がいる家なんぞ気持ち悪くて住めないそうな。それきり、飯の葉は絶えた。蚕らは、どんどん弱つて儚くなつた。あの子が最後さね」

蚕の子は、萎れた葉の上に、溶けかけた千歳飴のようにぐったりとのびている。

「あのヒトが後生にと頼んだに、蚕どもは、見捨てられた。それに、この家があるのも今日が最後だ。潰して、つがいどもの新しい家を繕いなおすんだそうな。あのヒトが守ろうとしたものが、全部なくなる。確かにそれは理の流れであらうよ。それでも」

かつん、とまた牙を鳴らして、年経^{としふ}りた蜘蛛は空蚕を見た。

「わっちを綺麗だと言つてくれた、あのヒトの願ったこと、ほんのちつと、形なりとも叶えてやりたいと思うのや。あの子の為やのうてヒトの為、あの子には迷惑やもしれんが、そこはわっちの我侭よ」

「……煮殺す為に可愛がられている族だよ。蚕は、ヒトがいなくちゃあ生きられない、理外れことわりはずの族だうから。病にも風にも雨にも耐えられない。そのあの子ひとり、自然に放り出したって、ただ儚くなる場所をたがえるだけだよ」

飼育される蚕は、雑種強勢を計算して作られる一代雑種だ。煮殺して絹を得る為だけの虫に、未来はいらない。継代飼育は解禁されたが、生かされて次代の種を残すことを許されているのは、実質交配用の原蚕だけだ。

生み出されては殺されていく、600種の子供たちの為に、病や寄生虫から完璧に守られながら。

「生かしても益はない虫に、ヒトが何を願ったって？」

「あの子らの族は、もう千年も前から、飛べない体にされてるそう
な」

大蜘蛛は、空色の蛾の、たたまれた翅をじつと見た。

「あの子を、飛べる体にしておくれ」

空蚕の触角がぴんとそばだてられ、次の瞬間、蛾とは思えぬ俊敏さで舞い上がるように、

「わっちの速さをみくびるでないわ！」

さらに瞬発力にまさる蜘蛛に、その瞬間くわえこまれる。

「駄目駄目駄目、刀自殿だって生きていられるのは本当にたまさかなんだから！ 僕をひとかけら食ったところで、どうなるかなんて僕にも判らないんだよ？」

「やってみなければわかるまいが。わっちが舐めたは、お前様のほんの一粒。むしろ痛くも痒くもない同じ一粒、無駄を承知で、蚕の子にも分けてくれと、そう言うただけや」

羽ばたこうとして、空蚕は動きを止めた。暴れれば、鱗粉が散る。それに、智慧もつ蜘蛛は、巧妙に空蚕の首根っこを牙ではさみ、かつ傷をつけてもいなかった。

「ああもつ……ヒトに義理立てして蛾を守る蜘蛛なんて、ヒトのものがたる絵空事にだってでてこないよ、まったく」

ぐてん、と翅も触角もへこたれて、空色の蛾はぶつぶつ文句も垂れた。

「ここで断わったら、僕の首をこのままちゃんと食いきって、翅をあの子にやるんでしょ？」

「お前様が蛾の姿でよかつたわ。これが狩り蜂やら百足やらなら、わっちも説き伏せに手間がかかったわいな」

空蚕をがっしりとくわえたまま、得意げに蜘蛛は答えた。

「説き伏せ……捕食の勢いで襲ってくるのは説き伏せるって言わないよ、刀自殿……」

「だってお前様が逃げようとするから。それに、卵囊ゆりかこを抱いてるのと同じに、優しゅう捕とらまえておろうが」

「困ったなあ……刀自殿みたいに、うまくいくとは限らないのに……」

ぶらぶらと蜘蛛にくわえられたままの空蚕の後翅が、つんとひっぱられる。

「あ？」

「くものおばちゃん、このひとたべるの？ あたちもたべられるかな？」

蜘蛛の足の下に、蚕の子がもどってきていた。

「……これでお前様も諦めがついたのう、空の」

「あー……なんか、もう色々となし崩しだ……」

空蚕の後翅の端を、ほんの僅か、鱗粉一粒分ほど、蚕の子はもぐもぐと口に入れていた。

空蚕は蜘蛛にぶら下げられたまま、くるとくと触角を撫でつけた。

貳・ましろの（後書き）

虚空蔵：アカーシャ・ガルバ。虫が仏教を知っているはずなのにですが、純粹に「そうだったもの」として用語を使用。

蚕の飼育：蚕は病気や寄生虫に非常に弱いため、それらの蔓延を防ぐ目的もあり、無許可の飼育や繭の売買は禁じられていた。解禁されたのは平成10年。

卵囊：タカアシグモの雌は卵を自分の糸で繭のような袋つめて、飲まず食わずで持ち運びます。

参・ぬばたまの

新月の濃闇の中、明日に解体を控えた古民家の庭先を、奇妙なものが這っていく。

腹足をふんばり、わずかに上体もちあげた、「眠^{みん}」と呼ばれる姿勢の蚕が、そのぴくりともせず固まった姿のまま、すすす、すすす、と滑るように動いていくのだった。

「……桑畑とやらは、まだかや。足が疲れて、もげ落としたくなるわ」

泣き言をこぼすのは、頭胸の上に、その眠の蚕を載せた大蜘蛛である。

「あの家の近くにも桑はあったけど、たぶん家と一緒に根こぎにされるから。遠いほうがいい」

蜘蛛と蚕の先をはたはたと飛んで、先導するのは真昼の空の色の蛾だ。

彼は集落の外縁近くの雑木林を目指していく。

「わっちも腹が減ってきたわ。そこらに地虫でもおらんものかの」

「その子が衣脱けるなり、動き出すなりしないと、狩りはできないんじゃない？　すごくがっしり、へばりついてるもの」

「蚕の子らの足には、こんな力はないぞえ！　こやつら、うっかり棚から落ちようものなら、はいあがってくることもできない足弱ぞ」

「……もう、その子の理が変わり始めてきたのだろうね。どういう仕組みかは、僕にもわからないけど。あ、着いたよ」

地面ぎりぎりを飛んでいた空蚕が、ふいっと舞い上がり、低木の枝に留まった。

「これが桑の木」

「ようやくかや」

しんどいしんどいと言いながら、するすると滑らかに蜘蛛は幹をのぼる。垂直に傾いた蜘蛛の背からも落ちることなく、蚕の子は生えた茸こけのようにびくともしない。

「やれやれ、わっちは一休みするぞえ。空の、見張ってておくれでないか。こんな外の開けたところは落ち着かんぞな」

四方に伸ばしていた足をきゅっと縮こめて、脚高蜘蛛は木瘤のように丸まった。

「うん、まかされた。毛ものが来た時はどうしようもないけどね」

「これではわっちのまま狩りも暫くはおあずけかの」

そういつて眠りはじめた蜘蛛の頭上の葉裏に、さかしまに留まって空蚕も翅を休めた。

蚕の子は、三回目の衣脱けを済ませている、といった。ではこれが、五齡に至る最後の眠だろう。この眠りから覚めたとき、四回目の衣脱けがはじまる。硬直して、見た目は死んだように動かない雛虫のなかでは、成長するためのからくりが、ひと時も休むことなく動いている。満天の星が、静止しているように見えて、めまぐるしく位置を変えていくように。

——ねーむーいー

蚕の子は、空蚕の翅を食はんでからすぐ、そういつてむずかり始めた。

「え、もうかや？ まだ次の衣脱けまでには早かろう？」

「わかんない、でも、はじまるのー……ねむいの」

てれんと伸びた白い体が、ほんのりと光沢を帯びている。「眠」のはじまる前兆だ。

「空ろの！ これ、これどうしたらよかろうの？！ こやつらの最後の眠は二日はかかるのや！ 今日動かせなんたら、みんなわやや

！」

「刀自殿、体をもつと伏せて。そうそう。で、ほら君はこつちきて「やーん」

空色の蛾は、白い芋虫の脇を頭でぐいぐい押して、蜘蛛のほうに押し付ける。

「何をするかや空ろの！」

「この子をおぶってよ。刀自殿がくわえて運ぶにしても、この子の体は長いから、ひきずられたら傷になっちゃうでしょ？ 前に子負い虫の旦那さんがやってるの見てさ、真似してもらおうかなって」

「おぶう？ おぶうって、なんや？ あ、重、重た！ これ！」

「ねむ…… ぴんってしたいのう……」

「うん、それ、ここでやるうね。はい、登って登って」

「うーうー……」

もそもぞ、よじよじと、蚕の子は蛾におされるまま、足をすすめる。

「もー、らめらよう…… わたち、ねる……」

そして、ぴたりと蚕の子は動きを止めた。

蜘蛛の背の上で。

「なんぞ？！ こりやどういうことや？！」

「刀自殿、暴れない。そのまま、夜になったら山際の桑畑まで僕が案内するから、そのまま運んで」

「えらいことになりよったわ……」

「僕に関わったり、ものを頼んだりすると、たいていはえらいことになるよ。いまからでも、その子振り落とす？」

「ええい、面倒みるわえ！ わっちもおなごぞ、族が違えど守ると決めた雛っ子、見捨てはせんわい！」

「僕もちゃんと見届けるよ」

そうして真夜中、蛾と大蜘蛛の奇妙な道行きははじまり、ようやく目的の場所に着いたのだった。

蜘蛛は眠る。蚕の子も眠る。空蚕は静かに、その彼らを見守っている。

眠りも食も必要ない、無窮の時を閲する彼は、待つことに飽きない。

朝、村のほうからは鉄の蟹じみた重機の立ち入る音と、壊されていく家の悲鳴がたちのぼり、人間たちの騒がしい気配が濃くなつたが、この林の周りに来る者はいない。

様子を見に来た蟻や、桑の実目当ての鳥や虫がざわざわ寄り集まってはきたが、空蚕の周りには寄り付かない。理に則^{のっと}って生きるものたちは、蛾の姿の向うに、黒々とうつろなもののひるがりを感じ取る。

理が、敬して遠ざけよと、彼らの本能にささやきかける、その声を正しく聞く。

「……ちっちゃい子は、それが鈍いんだよなあ……雛虫には金輪際、僕は近寄っちゃいけないな」

桑の葉の裏で、くると触角を撫でて、空蚕はひとりごと。

（たべては いけないもの が います）

（きをつけて きをつけて）

鳴き声で、匂いで、鳥や虫はその桑の木に寄らないよう、情報かわす。

「確かに、僕くらい役に立つ見張りはいないね」

人からも虫からも、桑の木は守られる。

蜘蛛はまだ眠る。蚕の子もまだ眠る。空蚕は静かに、その彼らを見守っている。

蚕の子の眠があける二日が過ぎるまで、空色の蛾と白い芋虫と大蜘蛛は、静寂のなかでまどろんでいた。

参・ぬばたまの（後書き）

子負い虫^{コオイムシ}：水棲昆虫。雌は雄の背中に卵を産み付け、孵化するまで雄は卵塊をおんぶしたまますごす。

肆・こみどりの（前書き）

人間が出てきます。

肆・こみどりの

「刀自殿、足をもつと後ろに下げられない？ 棘がその子に刺さりそうだよ」

「やっておるわ！ ええい、目がこやつでふたがれて、うつとうしいたら」

「んーしょ、んーしょ」

蚕の子の衣脱けは、真昼にはじまった。

濃緑の葉陰で、白い芋虫を前のめりに載せ、足をじたばたさせている大蜘蛛と、葉裏に留まったまま、はたはたと羽ばたいて風を送る空色の蛾の様子は、見るものがいたら滑稽だったにちがいない。

「あついのー」

「休まないで一氣に脱ぎやれ！」

「あい。がんばる」

もじもじと体をよじらせ、もがいて、蚕の子も必死で薄皮を脱ぎ捨てようとする。

蜘蛛の頭の上から、その前の木の枝の上へと、もちもち、よじよじ、全力で新しい体を這い進めていく。

「あともうちよつとだよ。どっちもがんばって」

「おちりはぬーげーたーのー！ あとはあたまー」

「ああ、とりあえずわっちの上からはどいたの。古衣を糸ではりつけよってからに、どこぞでこそげねば気色が悪うてかなわんわ」

背中に残った抜け殻を、蜘蛛はなんとか振り落とそうとしている。その一方で、仮面を一枚落とすように、蚕の子は頭の殻もぽとりと脱ぎ落とした。

「大丈夫？ ここはとても細い場所だよ。君、つかまっていられる

の？」

「うん、へいきよ。ころもをぬいだら、あし、つよくなったの！」
胸足、腹足でしっかりと桑の枝にしがみついて、蚕の子は空蚕に上機嫌で答えた。

「いっぱいごはんたべたい。はやく、からだが、かたまらないかな……」

脱皮したての弱い表皮が固まるまで、蚕はしばらく動かない。うとうと、蚕の子は脱皮の疲れからまどろみだした。

「もうあの子は、蚕ではない、なにかになったようだよ、刀自殿」
空蚕は、ぽつりとそう告げた。

細い枝に止まっている。普通の蝶や蛾の幼虫たちには当たり前ごとが、蚕はできない。

つかまり続けていられずに、落ちてしまうのだ。平坦な蚕座の上でなければ、満足に歩くこともできない、いびつな種。

「わっちも、もう違う何かに、なっておるのかの」

「……ヒトの言葉をわかる蜘蛛は、この世では刀自殿ただひとりだろうね」

「わっちはそれで困ってはおらんがの？ 理を外れるのは、とても恐ろしいことが起こること、と思うておったが」

「ごきぶりたちの声も判るようになったでしょ。食べにくくない？」

「ああ、あれは、仕方なかる？ 今更、痛い、やめろの、言われどもなあ、そりゃあたりまえぞ。殺すのだもの。それに、言葉がわかったところで、あやつらの美味さが変わるでなし。今までも食ってきたもの、これから食うに決まっておるう？」

不思議そうにいう蜘蛛に、空蚕はくりっと首をかしげた。

「うん、それならいいんだ」

「お前様もよくわからないことを言うの。ヒトのようや」

「ヒトね……そういえば、刀自殿。あの子を飛ばしてやりたいっていうのは、ヒトの願いだといったよね」

「そうや。あのヒトが横になってな、そのまわりが汚うなってきた

ら、ごきかぶりどもがうるちよろしやがるから、かたっぱしから食っておったのやがな。その時な、そう聞いたのや」

空蚕は触角をふるりとゆらす。

虚空蔵の時軸を触角で一なでし、その時の光景を垣間見る。

尿臭、便臭のこもった、薄暗い和室。布団に寝かされた、ヒトの老婆。枕元には下げ忘れたのか、冷え切った粥と刻み野菜をのせた皿。それも、僅かに腐臭を放ちだし、部屋の空気を淀ませる。

臭いにひかれて、ごきぶりが畳の上を這い、あまつた食事にあやかろうとやってくるのを、驚くほどの速さで奔る巨大な蜘蛛が、次々に襲い、蹴散らしていく。

「己等はへつついまわりでは飽き足らず、ようものうのうと。……しかしこんだけ食うと、腹がくちくてたまらんな」

一匹を食べかけていても、新しい獲物が攻撃圏内にきたら、それを屠らずにいられない性の脚高蜘蛛である。ごきぶりたちは、あつというまに座敷から退散した。

「……ありがたいねえ。又シさんは、ほんとうにいい蜘蛛様だねえ」
ごきぶりを溶かしては啜っていた蜘蛛は、その声にふと動きを止めた。

老婆は惚けることなく、ただ動かない体に縛り付けられて、そこにいるのだった。

「又シさん、きいてくれるかい。すごくいい夢を見たんだよ」
自分の息子夫婦には、惚けの幻覚だと謗られる話を、老婆は枕頭にはべる大きな蜘蛛に語る。

「私ねえ、夢のなかでおかいこさまになっていたんだよ。繭は、この布団でね。それで、布団からでて、はねをうごかしたらね、ふわっと飛べたんだよ。その障子戸も開けてあつて、そこから、空に飛んでいったよ。夜でねえ、月がものすごく綺麗だった。うちが小さくみえて、佐藤さんちの田んぼがきらきら光っているのまで良く見えた。又シさんの目のようだったよ。きらきら、きらきら、楽し

かったねえ」

幸せそうに、老婆は笑う。

「おかいこさまが、飛べるわけないのにねえ。私はおかいこさまから絹をいただいて、おかいこさまのおかげで生きてこられたけれどね、思えばかわいそうだねえ。煮られたおかいこさまたちが、せめてあんな風に、天に向かって成仏しているなら、いいねえ」

言われていることが複雑すぎて、蜘蛛には半分ほどヒトの言葉はのみこめない。

ゆめ、とはなんだろう。ヒトが蚕になって空をとぶ、そんな理はありえない。煮られた蛹は、羽化しない。するわけがない。死んでいるのだ。それなのに、死んだ蛹どもが飛べるとは、どういうことだろう。

そのヒトは、蚕たちに、詫びている。食うことを詫びるとは不思議だ。大切な食わなければいいものを、それでも詫びながら食う（わっちはごきかぶりどもを食うのに、ありがたいやらもうしわけないやらなぞ、思わんもの）

ヒトの言葉はわかって、ヒトの考えることは、蜘蛛にはわからない。

「寝たきりになって、おかいこさまの不自由さがちよつとわかったねえ。ああ、おかいこさまたちもね、できるならきつと、飛びたかろうね。……飛ばしてあげたいねえ」

わからないが、智慧を得た蜘蛛は、考える。

死んだ蛹は飛ばない。しかし、生きている幼虫たちは、まだ小屋裏にいる。

ヒトはゆめとやらで飛べるそうだ。こんな重たい肉の体の生き物が飛べるなら、かりにも翅をそなえて羽化するあやつらが、飛べない道理があろうか。

むかしむかし、ずっとむかし、脚高蜘蛛たちが海をわたってくるよりもずっとむかしから、蚕は飛べない、ヒトの手に頼って生きる虫だ。

飛べるわけが無い。

飛べるわけが無いが、もしも。もしも、ヒトがゆがめたその理を、ゆりかえすことができたなら。

蜘蛛の神経節に、その時小さな閃きが走った。

「これ、ちゃんと聞いとるかや、空ろの」

気付けば、空蚕の目の前には黒光りする巨大な牙があり、頭を触肢でぺしぺしと小突かれていた。

「やめてやめて。うん、ちゃんと『見てきた』よ。刀自殿も、ずいぶんヒトにいれこんだね」

「いれこんどるか？ なんとこのう、聞いているうちに、わっちも見たくなつたのや。わさわさがさがさ、歩き回るしかできなかったあやつらが、お前様や、蝶かたつばしのように飛ぶところかの」

「自分が飛びたいとは、思わなかったんだね」

「ゆりかごから出てすぐの頃になら、糸を吹き流して、わっちも風に乗ったものさ。わっちのような羽無しの八つ足が飛べるのだもの、羽つきを飛ばすくらい、お前様にはたやすかるうて」

「僕にできるのは因を揺らすだけ。それがどんな果を孕んでいたのかは、僕にはわからない。ただ、刀自殿が昔僕のかけらを食べてしまった時に、もうあの子に通じる因も縁も、成ったのだらうね」

「……また小難しいことを。お前様を食ったあと、どう生きるかはわっちら次第ということやろう？ なに、わっちもこのとおり息災でおるし、あの子も足が立つようやし。それでよかるうが」

「まあ、そうだね」

白い雛虫が、ふいにひょくんと頭をふりたてて、きよろきよろとあたりを見回した。

あたりはもうすっかり暗い。

「ふいー。あー、おなかすいた！ おなかすいたのよ！」

体皮はしっかりしたものとなり、五齡にしては小さいがふっくらした体の中に、健やかな体液のめぐりが透けてみえる。

「いいにおい！ まわりいっぱい、すごくいいにおい、いっぱいね！ あたち、たべる！ いっぱいたべるよ！」

「葉のあるところ、わかるかい？ 自分で探して、食べられるの？」家蚕は、自分からほんの一尺ほど餌を遠ざけられると、もう自力では探せない。うろろろとあてどなくさまよって、すぐそこに見えているはずの餌にたどりつけずに、餓死してしまう。

まして、足弱い彼らは、うろろろするのさえも、このような樹上ではろくにできず、落ちたら最後、二度と木に登ることもできない。「いいにおいのするほうにいけばいいのよ！ だいじょうぶ！」

いいながらも、もう蚕の子は先細る枝先にどんどん這っていき、手近な葉の上にのぼって、ぱりぱりと齧りだした。不安定な葉のゆれるのにも、しっかりとひりついて、一心不乱に食べていく。

「おいしーの！ すごくおいしーのよ！」

配合飼料のみで飼育できるよう、味覚をとりあげられた種もいるが、この子はそうではないらしい。

「すっかり元気になりよったの。ここまでして、狩り蜂や鳥に食べられたら業腹や」

単眼八つ分の視線が、全部自分に集中しているのを感じて、空蚕の翅がどこかげんなりと、肩を落としたように下がる。

「あの子に、僕がついていればいいんだね？」

「わっちも月が太ってきたら、様子をみにくるわいな。まかせたぞえ、空ろの」

「はいはい……」

軽やかに、いそいそと狩りに出かけていく大蜘蛛を見送り、空色の蛾は触角をしょげさせた。

肆・こみどりの（後書き）

因と縁と果：これも仏教の概念ですが、「そういうもの」として使っています。詳しくは因縁生起や縁起でおググりください。

味覚のない蚕：広食性蚕といい、安い（蚕にとってはまずくて食べない）配合飼料のみで、最後まで育てられるように改良された蚕。味覚が無いので、キャベツだろうがリンゴだろうが、与えられたら食べてしまう。本来の食草さえ忘れさせられた蚕。

伍・そして、つきしろの

祈る手のように綴りあわされた桑の葉の間、純白の繭の端が、しつとりと濡れそぼつ。

幾重にも幾重にも、固く編み上げた揺り籠が、甘露をこぼすくちづけで内側からときほぐされていくのを、大蜘蛛と、青い蛾は、見守っている。

桑の木が一番高い枝の葉陰、一番細い枝の先が、ゆら、ゆら、と揺れる。

小さな頭が、やわらかくほとびた繭の端から、ようやくのぞく。ゆつくりと、ほそいほそい枝葉の上へと、まだおぼつかない肢を伸ばして、あやうい均衡をたまちながら、羽化はすすむ。

昼の蒸した草の匂いを打ち消すように、涼しい月光が山の端からさしのぼると、夜行のものたちの気配が、山野にどよもす。

目覚め、食らい、婚えと、望の月が煌々^{よほ}と宣り賜う。

ヒトの耳には聞こえない、そのかまびすしさを他所に、静かに、蜘蛛と蛾はその時を待つ。

「ころころしてくる、あのおつきなてがないの」

忙しく葉を食む昼に、蚕の子はそう言った。

「ころころされるの、ちょみつとたのしーのね。ここだとね、ころころできないね」

「これ以上目立つことはしないでくれるかなあ……」

桑の緑に、白い虫は目立つ。判りやすい餌だと寄ってくる狩り蜂や鳥の鼻先に舞い、食べるなら僕をお先に、と空蚕が言えば、皆あ

わてて遠ざかる。

追い払うのはたやすいが、昼夜問わずに何度も何度も繰り返すと、さすがに面倒臭い。

「今ね、君は結構おいしそうなんだから」

「そうね！　おいしいものたべてるとおいしくなるのね！」

きゅつと胸足で桑の葉の端を抱え込み、蚕の子はしゃくしゃくとまた食べ始める。

「いっぱいいたべるとね、いっぱいころしてもらえるのよ。いいこいいこねって」

あのヒトの老婆は、よほど丁寧に蚕たちを扱ったのだろう。蚕座の掃除の時毎に、蚕たちは山盛りに別の蚕座によけられているが、それを嫌なものだ、とはこの雛虫は感じていない。ヒトの手に触れるのは、薄い表皮の虫たちには熱く焼けた鉄を押し当てられるのと同じくらいの苦痛だ。ヒトの皮膚に薄く張っている脂肪酸と、一定した体温は、小さい虫など釜茹で同然に弱らせてしまふ。なにより、

「ヒトの言葉がわかるの？」

空蚕の鱗粉を口にした時には、もうヒトはいなかった。ヒトの言葉をわかるように理^{ことわり}が歪んだとしても、この子がそれ以前に言われたヒトの言葉を理解しているのは、奇妙なことだった。

「ちよっぴり！　ちぢやははたちの、そのまたちぢやははたちが、あたちたちにも、わかること、のこしてるの」

「……恨み言、とか？」

卵を孵してもらうのも、大事に育ててもらうのも、その全ての子を煮殺す為。野生に返ることなど不可能なほど、ヒトの手によって歪められた種の、それは悲劇ではないのか。

「ちまうよ」

だがけろりと、蚕の子は首をかしげた。「うらむのって、おこるってこと？　なんで？」

「ヒトは君たちを大事に育てるけど、結局殺すんだよ。それを延々、

繰り返してきた。ヒトの勝手でさ」

「そうね、あたちたち、いっぱいこるされるね。うん、すごいっぱいね。けどね、ヒトは、あたちたちのみはりなの。うつろちゃんとおなじこと、ヒトにやらせてあげてるのよ」

腹脚で体の上半分をもちあげ、白い雛虫は誇らしげに三対の胸脚をぴんと張った。

「いっぱいいわたちたちがしぬことで、ちちはは、のこっていくの。わたちたちは、とぎれないの。ヒトをめしつかって、ずっとこのこるのよ」

石に彫刻された作り物のように、空蚕は動きを止めた。蚕の子は、また無心に桑を食べ始める。しゃくしゃく、しゃくしゃくと、その音だけが桑の木の静寂を乱している。

「ヒトもまだ、理のうちにあるのかな」

空色の蛾のつぶやきは、その音にさえ負けて、紛れたが。

ぼつてりとした腹が、繭を抜けた。3対の肢でしっかりと枝につかまり、皺ばんだ翅が、少しずつ伸びていくのを、蚕は静かに待っている。

「あのやかましかった雛っ子とは思えんの」

「美味しそうだとは思わないの、刀自殿」

「思うとも。けどそれ以上にな、食うのが勿体無いほど、綺麗やしの。ふうわり、己でひかつておるようや」

まろい体も肢も、柔らかく豪奢な毛皮にふくふくと包まれて。

純白のびろうどで仕立てた打掛のような翅も、いまや裾引くほどに。

花嫁御寮の白無垢にして、終わる時への白装束。

闇の中、ほのかに暈がかかって見えるほど、けざやかに明るみ。

淡い金に裏打ちされた、あたたかい雪白の、小さな蛾。

「つきが」

大きく愛くるしい、艶やかな複眼が、月光に濡れる。

「つきが、とんでいいよって」

重たげに見える翅を、蚕は羽ばたかせる。最初はおどおどと、やがて激しく。

「だれも、できなかったのに。なのに、つきが、そういう」

羽ばたく力は、怯える肢を枝からもぎはなそうとする。その強さを恐れて、蚕は首をふる。

何千年以上も忘れられていた術が、ちいさな蚕のなかにいちどきに甦って、羽ばたきを止めさせてくれない。恐れても戸惑っても、揺らされた因が、彼方の時のむこうから、空に誘^{こゝろ}つ。

とべ、と。

「おいき。お前さんを大事にしていたヒトも、わっちも、それを見たかったもの。見せとくれな」

脚高蜘蛛の声に、蚕は、空色の蛾がするように、くると触角を前脚でかかえこみ、撫でつける。

すだく小さな羽虫たちが、飛び交い、鳴きかわし、食らいあい、求婚の香をくゆらせ、その喧騒が野山に満つ。

朽ちた蚕室には戻れない、もう残り少ないその命を全うするのはここなのだと、世界がいう。

こい、と。

陽も月も星も、虫たちにとって、光は目指して飛ぶものではない。己の居場所を確かめる羅針盤であり、迷わずすすむための目印にすぎない。

人のつくる贗物の灯りは彼らの目を騙し、道筋を歪ませる罠となるが、今この天を庄する満月の光のもとに、なんの妨げになろう。万障繰り合わせて、この一夜はきた。

「おいで」

大蜘蛛とともに静観していたうつろのこは、ふわ、と舞い上がった。

夜空にひとかけら、真昼の空が割りぬかれる。

「君は、途切りたい？ 父や母が残っているなら、君は、何も残さなくてもいい？」

「……ううん！」

そして。

ましろのむしは、翔ぶ。

古い殻をそうしてきたように、恐れを脱ぎ捨て夜天へ。

瀕死の蝶よりみつともなく、宙を蹠跟い、あがいて、けれど決して落ちず。

ふらふらよろよろ、おぼつかない翅をばたつかせ、けれど気付けばあの桑の木もはるか眼下に。

（楽しいの）

（楽しいよ）

ほかの羽虫たちが謡う千の声万の声に、自らの声も和して、望月しろしめす真夜中、まばゆいほど白い虫は、翔ぶ。

（楽しいね）

（楽しいね）

同じ族が千の時万の時を越えて叶わなかった夢を現に顕して、ひたむきに、飛ぶ。

「ほんに、綺麗やの」

舞い戻った空蚕に、蜘蛛はつぶやく。

「わっちもゆめとやらを見れば、ひひるのように飛べるのかの」

「……かもしれないね」

可^{あた}惜^ら夜^よ、月^{つき}はし^ずむ。終^ひ夜^よ続^ついたさんざめきは遠^{とほ}ざかり、暁^{あか}降^とに

鳥たちの声がこだまはじめる。

夜族の時は終わり、再び陽光のもとに世界は白々と明けていく。

空に、もう白い姿はない。

ただ、蜘蛛と空蚕のなかに、消えずに響^こむ声がある。

たのしいね。

たのしいね。

いきているのは、たのしいね。

蜘蛛は眠りにつく。己のうちに、ゆめを探りに。

うつろのいろの蛾は、また舞い上がる。

風のまにまに。

了

あとがきにかえて

今作は何のギミックもひねりもない、ただだらーっと、カイコの半生を追っただけの話です。

カイコという、人に完全に依存しなければエサをたべることもおぼつかない、白くて小さな、ふつくふくの愛らしい蛾と、ゴキ退治するアシダカ軍曹！という萌えだけで書いてます。

もともと絵ありきの話なので、文章で楽しむ物語らしい筋立ては、特にありません。その分、会話以外の文章表現と描写には腐心してみたのですが（当社比）。

今回の話を書くにあたり、様々なカイコ飼育サイトを参考にさせていただきましたが、割と、悲劇の虫、と見る人が多いように思います。

しかし、人に依存して生きる、人に遺伝子をいじくられてもいいという命のあり方は、実は植物をはじめ、生存戦略的には叶っている、という話を聞いたことがあります。

人というのは、地球上で爆発的に増えた種であり、生存環境に適合するかわり、生存環境を大規模に作り変えていくという特異な種です。

しかも、この種は、いつごろからか、自分たちの餌を、意図的に増やす行動をしはじめます。

ハキリアリがキノコを栽培するように、アリがアリマキを外敵か

ら守るように、です。

植物でいえば、現在の麦や米をはじめとする野菜は、おそらくそのあたりの雑草よりも、生えている面積や本数は断トツに多く、人を介して世界を征服しています。

地球上でもっとも繁殖している植物です。

同じことは動物にも言え、牛や豚、鶏も、繁殖数は野生動物よりはるかに安定し、殖やされてきた種です。

つまり、人間の口に合う栄養素、味を持っていた、または栄養素、味をあわせていける、そういった要素と引き換えに、彼らは人間を利用して自分たちの領土を広げてきた、と言い換えることができるのです。

生き物の本分は、生み、殖やすこと。種を繋いでいくこと。その視点から見れば、より安全確実に生き残る戦略として、人間を共生相手として利用するのは「理にかなっている」のです。

カイコは一説によれば、中国ではすでに5千年前から、絹をつくる飛べない虫だった、とされています。ヤマモリガの仲間是他にもいるのに、桑蚕（もしくはその近縁種）だったカイコだけが、人間による改良と繁殖に適応しました。

膨大な数のカイコが絹のために煮られてきましたが、それでも自然界にいるヤマモリガの仲間よりもはるかに多くのカイコが、原蚕として種苗所で大事に守られています。

五千年、日本の種でも千年、その間にどれほどの生物が絶滅してきたか、させられてきたか、と考えれば、カイコの生存戦略は実は間違っていない、と思われまふ。

本来の野生の性質はほとんど作り変えられて、原種さえ不明な虫ですが、それを不幸だ、ひどい改造だと思っるのは人間の勝手な感傷のように思います。

彼らはそれを選んだ。

家畜のように、という言葉はネガティブに使われますが、実は彼らにとって都合のいい環境を整え、繁殖を手伝ってくれる人間のほうが、彼らに使われている下僕なんじゃないか、と思う次第です。

何がしあわせなんて、本人しかわからないことですしね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655y/>

みちてしうつろのものがたり

2011年11月15日01時20分発行